

江戸時代・縄文時代の遺構・遺物

江戸時代では畑の痕跡(畝跡)や敷地の境として設けられた生垣痕、井戸、建物の痕跡と思われる小穴など様々な遺構が発見されました。「武蔵国豊島郡雑司谷村絵図」では、遺跡周辺では番神通りから東通りにかけて村人の屋敷が連なって描かれており、発見された遺構はこれらに関連するものと考えられます。

調査区の南東側は建物のあとや井戸が集中し、西側には畝跡が広がります。絵図と比べると、南東側は生活をする場所で、西側は畑として用いていたと考えられます。

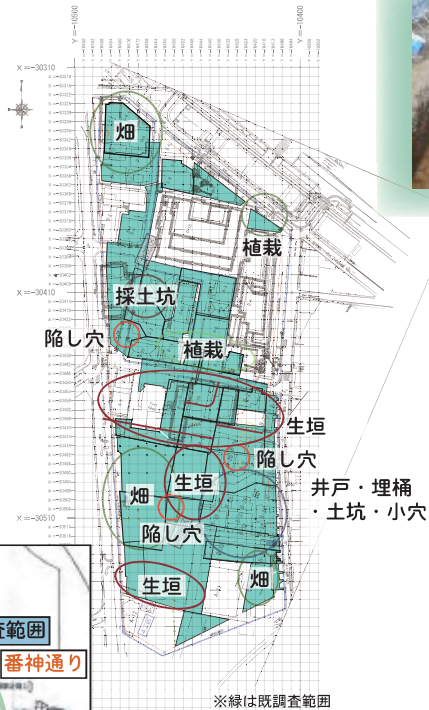
また、縄文時代ではシカやイノシシを狩るための陥し穴が発見されました。この地で狩りが行なわれていたことがわかります。



江戸時代の畑の跡
畝の跡が東西に連なっています



縄文時代の陥し穴



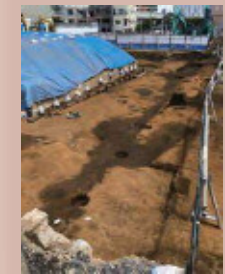
江戸時代以降の植栽痕



生垣痕から出土した遺物
磁器碗や焙烙などが出土



江戸時代の生垣痕
幅が2m近くあります



江戸時代の生垣痕
これから建設される2棟の高層マンションの境界も同じ位置に計画されています



江戸時代の井戸の断面
ふちに井戸の枠の痕跡があります



「武蔵国豊島郡雑司谷村絵図」(1772年)の一部を解読したものと

番神通りや東通りは江戸時代から存在しました。調査範囲には「市郎左衛門」「八郎兵衛」などの村人が住んでいたようです。

この遺跡見学会は南池袋二丁目C地区市街地再開発組合・清水建設株式会社のご協力により開催いたしました。

南池袋遺跡

南池袋二丁目C地区市街地再開発地区・南街区

遺跡見学会 資料

南池袋遺跡は江戸時代を中心とする遺跡です。調査は、市街地の再開発事業に先立って、2021(令和3)年8月から行なっており、現在も調査を続けています。

発掘調査では、縄文時代や江戸時代～昭和時代の生活の跡が見つっていますが、特に重要な発見として、日本の写真産業の始まりとなった「東洋乾板株式会社」の工場の建物跡があげられます。オフィス街や繁華街としてにぎわう現在の池袋から想像することは難しいですが、豊島区内には明治時代以降さまざまな工場がありました。雑司が谷地域の歴史や産業を語るうえで東洋乾板の工場は重要な施設だといえます。

今回の見学会では1927(昭和2)年に完成した東洋乾板の研究所やその関連施設を紹介します。



遺跡の位置
(破線部分は東洋乾板推定範囲)

東洋乾板株式会社

高橋貞二郎という写真技師が1919(大正8)年にこの地に設立した日本で最初のガラス(写真)乾板の工場です。

1921(大正10)年には「ST乾板」を発売したことで、ガラス乾板の大量生産が始まりました。1934(昭和9)年に富士写真フィルムが創設されると、東洋乾板は吸収合併され、その後は富士写真フィルム雑司ヶ谷工場としてロールフィルムや16ミリ映画の現像を行なっていましたが、1947(昭和22)年に工場は閉鎖されました。

ガラス(写真)乾板

「フィルム」と同じく、写真を写す「感光材料」の一種です。板ガラスにゼラチンと感光材(写真乳剤)を混ぜ合わせたものを塗り、乾燥させてつくります。



東洋乾板俯瞰図 1929(昭和4)年ごろ
出典：豊島区立郷土資料館 1994『町工場の履歴書』

これまでに発見された東洋乾板株式会社の遺構・遺物

南街区から西の環状5号線の工事範囲まで、「東洋乾板株式会社」（現富士フィルム株式会社）の工場が存在したといわれていました。今回の調査で東洋乾板株式会社の遺構（建物基礎や地下室）と遺物（ガラス乾板・実験道具など）が発見されました。



黄色の枠線部分を写した写真。手前からコンクリートでできた門の基礎、煉瓦敷の通路、コンクリートの基礎、1927（昭和2）年に建てられた研究所の煉瓦基礎。

研究所（新写真科学研究所）

1927（昭和2）年に建てられた2階建ての建物です。ガラス乾板の製造に関する実験や研究が行なわれていたと考えられます。

①研究所の基礎



煉瓦の基礎は下段を階段状に積み上げ、壁面は長い辺（長手）と短い辺（小口）が側面から交互にみえるように積みあげる「イギリス積み」という方法で作られています。煉瓦の外壁にあたる箇所にはモルタルが塗られています。「洗い出し技法」という方法です。



壁面に使用されていた煉瓦「欠」の刻印が見えます。ピアノ線で粘土を四角く切って成形する「機械成形」という作り方です。

②研究所の地下室



壁面に白いモルタルと黒いタールのような物質が交互に塗り重ねられています。薬品などの保管庫や研究で用いられたと思われます。



⑥性格不明の基礎



石と廃材の煉瓦を用いた基礎です。

⑦事務所の基礎



工場の入口に面して建てられた事務所です。コンクリートの基礎です。

⑤新工場の基礎と排水施設



研究所と同じ1927（昭和2）年に建てられた新工場の基礎と、排水を流す土管。ガラス乾板の製造には水が大量に必要でしたので、排水施設は重要であったと思われます。

④研究所裏の地下室



長方形の地下室です。埋め戻した土からガラス乾板や実験用具などが出土しました。研究所で使われていたものかもしれません。



出土したガラス乾板
乾板を意味する「…RY PLA …」（DRY PLATE）と書かれた紙が付いています。

③研究所のトイレ



汲み取り式のトイレを2基発見しました。手前の便槽からは割れた和式便器が出てきました。



1基は仕切りがついた浄化槽つきトイレ。



和式の便器
「東洋陶器株式会社」のマークがみえます。